

設問番号	I. (1)
解答例	デューイは、経験がそのまま教育になるわけではなく、経験の中には「教育的でない経験」が存在すると述べる。教育的でない経験とは、学習者の成長を阻害し、未来の経験の質を低下させる経験である。デューイの経験論における「連続性」(continuity)と「相互作用」(interaction)の二原理を基準にすると、その非教育性を明確に説明できる。例えば、児童の学習における失敗体験が否定的自己概念を形成する経験を挙げる。この経験は、学習者の内的状態を不安・無力感へと傾け、環境との建設的な相互作用を阻害する。また、否定的自己概念は次の学習経験への挑戦を妨げ、経験の連続性を断ち切る。デューイが指摘するように、「教育的でない経験」も存在し、このような経験は未来の経験の可能性を狭める点で教育的ではない。 こうした点を総合すると、教育的でない経験とは、学習者の成長を阻害し、未来の経験の質を低下させる経験であり、デューイの二原理に照らしてその非教育性を説明できる。
出題の意図	設問 I は、人間科学研究科博士後期課程アドミッション・ポリシーに掲げる「修士の学位を有するもの、またはそれと同等の研究実績のあるものであって、学修に十分な学力及び専門分野における豊かな知識・技能」に関わり、教育学分野の学修に十分な学力及び専門分野における豊かな知識・技能について問う問題である。 設問 (1) では、デューイの経験論における「教育的でない経験」という概念を具体例を用いて説明する力を問うものである。受験者には、引用文の理解にとどまらず、デューイが提示した「連続性」「相互作用」という二原理を適切に適用し、経験の教育性を理論的に分析する能力が求められた。これは、教育現象を構造的に理解し、人間の経験と学びの関係を学術的に探究する力について確認することを意図した。

設問番号	I. (2)
解答例	デューイは、経験が自動的に教育になるのではなく、教育者が経験の質を判断し、方向づけることで教育的経験が成立すると考える。教育者は、経験の教育性を「連続性」と「相互作用」の観点から評価し、学習者が未来の経験をより豊かに構築できるよう経験を再構成する役割を担う。 まず、連続性の観点から、教育者はある経験が次の経験への橋渡しとなるか、学習者の興味や探究心を広げるかを判断する必要がある。否定的固定観念を形成する経験は連続性を損なうため、教育者はその影響を軽減する働きかけを行うべきである。 次に、相互作用の観点から、教育者は学習者の内的状態と環境の相互作用を観察し、経験が学習者にとって意味あるものとなっているかを評価する。経験が十分に意味づけられていない場合、教育者は学習者に対話や省察の機会を設け、経験の再構築を促すことが求められる。 さらに、教育者は経験の方向づけを行う存在として、適切な課題設定、支援の提供、振り返りの機会を通じて経験を再構成し、学習者が建設的な経験の連鎖を形成で

	きるよう環境を調整することが望まれる。経験は自然に教育になるのではなく、教育者の専門的判断によって、学習者の教育的経験へと転化される。 これらの点を踏まえると、教育者は経験の質を連続性と相互作用の観点から判断し、経験を方向づけ・再構成することで学習者の成長を支える必要がある。
出題の意図	設問（２）では、経験がそのまま教育になるわけではないというデューイの教育観を踏まえ、教育者が経験の質をどのように判断し、学習者の成長につなげるかを論じる力を評価した。教育者の役割を経験の方向づけ・再構成として捉え、学習者の内的状態と環境の相互作用を踏まえて教育的経験を構築する視点は、理論と実践を往還させながら教育課題を検討する力を確認することを意図した。

設問番号	Ⅱ.
解答例	下記の出題の意図を踏まえ、本問では以下の３点が論理的に記述されているかを評価した。 ① 体験型学習がどのような教育活動であることを具体的に説明している。 ② 体験型学習の教育的意義を、具体例を挙げながら論述している。 ③ 体験型学習の課題を、具体例を挙げながら論述している。 【解答例】 体験活動は園児や児童が自然や社会の中の対象に自ら働きかけ関わっていく活動であり、その子どもたちの「生きる力」を育み、成長の糧とすることが期待されている。例えば、小学校生活科における体験活動としての植物の栽培においては、植物の成長の変化を継続的に観察する中で、生命の大切さや自然を尊重する態度を養い、豊かな人間性や価値観が形成されることが期待されている。加えて、もし自分の植物がうまく育たなかったときに、単に残念がる・悲しく思うだけでなく、なぜ上手く育たなかったのかの原因を考え、日当たりや水やり・肥料のことを調べて次の栽培へと意欲的に向かうきっかけとすることが、児童への指導の観点となる。また、小学校生活科における体験活動としての学校探検では、友達や先生だけでなく学校の職員や地域の方など様々な人と対話・交流する中で、相手に感謝する気持ちや協働することの大切さを知るとともに、人と円滑にコミュニケーションを図ることなど、社会性を育むことにもつながる。 このように、体験活動は、単に体験するのではなく、その経験を通じて気づき、思考し、行動することを通じて学びを持続し発展させながら、自己の成長を総合的に育成させる点に、その大きな教育的意義がある。 したがって、ただ単に体験させればよいのではなく、その体験を通じて子どもたちにどのような学びを意図するのかを明確にしておくことが、体験活動を意義あるものとする上での課題となる。その意図・目的を達する上で考慮すべき具体例として、子どもたちの発達段階に応じて主体的かつ無理なく取り組むことができるような素材を選択すること、必要な時数を年間計画の中で確保すること、教科横断的な体験活動が想定されるときは各教科の範囲に閉じずに総合的な学習の時間等とも関連させた学び

	の場とすること、校外活動や観察・実験を体験活動に取り入れる際の準備や安全確保、地域連携におけるカリキュラム・マネジメントに配慮することなどが、挙げられる。
出題の意図	設問Ⅱは、人間科学研究科博士後期課程アドミッション・ポリシーに掲げる「修士の学位を有するもの、またはそれと同等の研究実績のあるものであって、学修に十分な学力及び専門分野における豊かな知識・技能」に関わり、教育学分野の学修に十分な学力ならびに基本的な知識・技能を問う問題である。 本設問は、基本的な教育活動の一つである体験活動を取り上げて、基本的な知識・理解をもとにその教育的意義や課題を論じる思考・判断・表現を問う中で、教育学における課題の認識と博士後期課程での学修に向けた基礎的素養を確認することを意図している。